人権コラム11月号

避難所のピクトグラム

大阪教育大学　岡田耕治

東京オリンピックの開会式で一躍有名になったピクトグラム。オリンピックの始まる半年前、今年の二月にピクトグラムをデザインする中学校の授業研究会があった。「ピクトグラムには、それぞれ作者の伝えたかった意味が込められています。人のためを思って作られているものなので、デザインを学ぶ上でぜひ生徒たちに作って欲しい」と、授業を担当する美術の教員は語った。「言葉がわからない人、読めない人、海外から来た人、自分が言葉の通じない国に行った時など、言葉がわからなくとも伝えることのできる力を知って欲しい」。

この教員はピクトグラムを９時間で授業を構成した。なぜ９時間の構成にしたかというと、実際にこの中学校が避難所になったら、どこにどういう部屋を配置して、その部屋に誰もがわかるピクトグラムを掲示するという、大きな課題を設定したからである。

自然災害が多発する日本では、いつこの学校が避難所になるかわからない。そうなった時、１階の教室はどんなふうに使い、階段を上がった２階の教室は、どんな部屋を配置したらいいだろうと考えていく。体育館の使い方、家庭科室の使い方など、避難所としての学校のマップを描き、その上で部屋の用途をピクトグラムとして表現するという、日々の暮らしが学びや創作することにつながる授業である。

私たちが研究協議の対象としたのは、全９時間のうちの８時間目だった。生徒たちは、それぞれデザインしたピクトグラムを学校のマップの上に貼っていくという作業に、頭を寄せ合って取り組んでいく。コロナ禍の中、マスクをつけたままの班活動だったが、一人ひとりの目の表情に意欲が感じられた。生活に直結し、地域に貢献してゆく学びが生まれる瞬間に立ち合わせてもらったのだ。もしこの学校が実際に避難所になったとき、この子たちはどんなふうに動くだろうか。災害対策の担当者や教職員も力を出してくれるだろうが、この子たちはきっとこの避難所を運営する主体として積極的に動くのではないだろうか。

新型コロナウイルスの感染拡大は、様々なところに影響をもたらしているが、その中にあっても、未来を担う子どもたちに力をつけようとする教員の姿に接することができた。